明治三十七年五月七日第三種郵便物認可
大正十年七月一日發行（毎月一回一日發行）
女子青年界第十八巻七月號

THE Y.W.C.A. MONTHLY

女子青年界

七月號

Y.W.C.A.

要目

日本基督教女子青年會發行

WANLINESS

〔第二十版〕

禁酒美談

(1) 辛盤を須ひず……（大内青巒氏）
(2) 小忠は大忠を賊す（江原素六氏）
(3) 三つの禁物………（福島安正氏）
(4) 名教の中に樂地あり（莊田平五郎氏）
(5) 自己と周圍………（內田嘉吉氏）
(6) 幼時の印象に醒されて（片山國嘉氏）
(7) 軍人と酒………（日疋信亮氏）
(8) 飲む人と飲まぬ人（森村市左衛門氏）
(9) 斯の事實を奈何にせん（島田三郎氏）
(10) 空中の王者より（アート、スミス氏）
(11) 合理的の生活……（中松盛雄氏）
(12) その俤を偲びて…（安藤文子氏）
(13) 世を警めの告白…（波多野鶴吉氏）
(14) 父の訓を守りて…（鵜澤聰明氏）
(15) 分配さるる歡樂…（新渡戸稻造氏）

四六判假製
壹百十九頁
五號活字假名付
定價三十錢
郵送料六錢

發行所 東京市麴町區三丁目 振替東京七八四七 丁未出版社

第十八卷第七號　女子青年界目次　大正七年十月號

第十六回

大正十年七月二十八日(木)夕より
同　八月　五　日(金)朝まで

静岡縣御殿場東山莊に於て

女子青年會夏期修養會

申込所　日本基督教女子青年會本部
東京市神田區錦町一丁目十六番地
電話神田三六五二番

申込期日七月十五日迄

費用
會費　金貳圓
滯在費　金拾參圓

自由詩歌

星

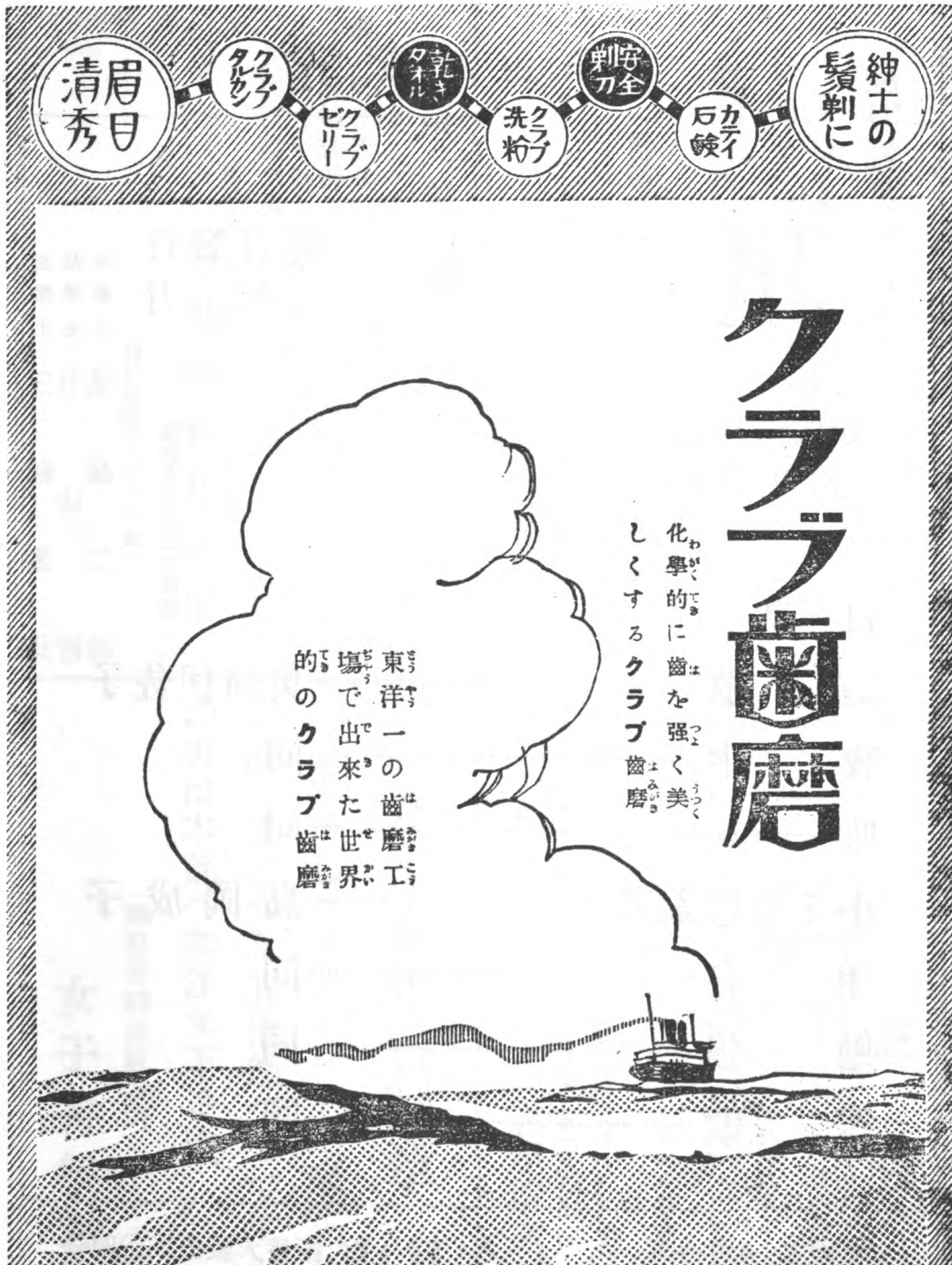
第八號

隔月發行
十年七月

定價貳拾錢
送料二錢

目次

發賣　大阪市南區新世界　ワイ文具店　振替大阪五九〇四一（電）南一七一三一


紳士の鬚剃に
カテイ石鹸
安全剃刀
クラブ洗粉
乾キタオル
クラブゼリー
クラブタルカン
眉目清秀
クラブ齒磨
化學的に齒を強く美しくするクラブ齒磨
東洋一の齒磨工場で出來た世界的のクラブ齒磨

女子青年界

第十八巻

第七號

「萬軍のエホバのたまふ是は權勢に由らず
能力によらず我靈に由なり」

婦人解放、婦人參政權、婦人と勞働などと色々の反響(コダマ)がそこゝに響いて參ります。

其叫に無聲の大音響を添へるものは智と徳と信仰とを備へた眞の力ある婦人の出現ではありますまいか。

聲高に叫んで血の海を走る前に靜に内省して智慧と力のもとなる神に行き、人間生活の向上の爲協力して努力しませう姉妹達。

第十六回夏期修養會を迎ふるにあたりて

今年も修養會が間近に來ました。此會の目的と希望とを申上て御來會下さる人々に心の準備をして頂き會友の御方々に祈の御援助をして頂き度ふ御座います。

散つて居る姉妹達が一つ庭に相寄り基督の啓示し給へる神の智識を更に進め、厚い信仰の火を燃やされ、神に絶對服從し智識と信仰とより溢れ出づる意義ある生活を實現する決心を固く致す爲の集です。

かうした目的から講師の選定にも委員どもが集つて出來得るかぎり心をつかひ、すぐれた先生方を恵によつて與へられた事は感謝にたえません。御來會の姉妹方はたゞに聖書講義、或は講演だけに止めず此よい機會に個人的に先生方に接觸遊して質疑され生命の流に働きと勵しとを得給ふやう今より此貴い時をよくお用ひ遊すやう御準備をしてゐらして下さいませ。又姉妹方お互が深い、淸い、しんみりとしたお交をなさり眞の友を得らるゝならば何と言ふ祝福でせう。基督を中心とした美しい交に小天國を描き出してほしいのです。神の殿の身體を健全に保たねばなりません故涼しい山の中で心靈の修養と共に此方面にも力をそゝぎませう。深緑の中につかつて此世の騒を離れ人を離れて唯自然と神とに靜に交る事も亦又必要です。それには今年は最も應しい御殿場の地芙蓉の姿が偉大な默示を與へ、東山湖は夕陽の空を寫して宇宙の秘密を私共にさゝやいてくれます。お話を聞き先生と語り友と交り湖畔を歩きながら冥想しかしこより來る火を受け我等の主を中心とした一週を過し、山を下つて常時の生活につく時こゝに養ひ得たものが大きい力の源となつて實生活に現れ受けつ與へつ四圍の人々に淸い流を及ぼし得るものを體得してほしいのです。

よき實は良い準備に得られます祈つてゐらして下さい。（修養會委員）

□場所　靜岡縣御殿場東山莊にて

□時日　大正十年七月廿八日(木)夕より八月四日(木)夕まで

	午前 六—六、三〇	八—八、一五	八、二〇—九、二〇	九、三〇—一〇、三〇	一一—一二	晝食後夕食迄	午後 七、一五—八、一五
	早天祈禱會	禮拜	聖書の組	講演	協議會	休憩	夕拜及講演
廿八日(木)	標語—汝等先づ神の國と其義とを求めよ（馬太傳六章卅三節）						開會式 司會者 河井道子
廿九日(金)	早天祈禱會	禮拜	聖書の組	今年の標語に就く 金井爲一郎氏	協議會		東洋問題 吉野作造氏
卅日(土)	同	同	同	自己否定よりの生命 金井爲一郎氏	同	親睦會	夕陽會 感話 織田やす子氏
卅一日(日)		禮拜十一時より 說敎「基督に對する遠近法」 森明氏					讃美禮拜
一日(月)	同	同	同	イエスの熱愛 武本喜代藏氏	夏季聖書學校に就て		村落傳道に就て ヴォリスまき子氏
二日(火)	同	同	同	久遠の女性 二階堂眞壽氏	協議會		遊戲講話及實習 ミス・フエリス
三日(水)	同	同	同	神秘とは何ぞ 富永德磨氏	市青年會に就て協議會		世界一週を終りて 木村淸松氏
四日(木)	同	同	同	「澳に出でよ」 木村淸松氏	萬國女子青年會		閉會式 奬勵 河井道子

注意

一、聖書の組

聖書の組

（一）少女の組…………河井道子氏
（二）求道者の組…………淺井治子氏
（三）舊約書（ホゼア）…………織田やす子氏
（四）新約書……馬太傳に依れるイエス傳梗概…………武本喜代藏氏
（五）新約書……ロマ書の神髓…………富永德磨氏

出席せらるゝ組を豫め御選定を願ひます、一校より數人の代表者來會せらるゝ場合には成るべく各自異つた組に御出席の方よろしからんと存じます。

二、費用　會費金二圓、滯在費金十三圓

三、携帶品　敷布、枕布、上草履等すべて質素簡單に願ひます朝夕お寒いこともあるかゝと思ひますから毛布、羽織等は必ず御持參下さい。

四、申込期日　七月十五日迄、東京市神田區錦町一ノ十六女子青年會本部宛、（電話神田三六五二）今年は場所の關係上、人數に制限が御座いますから成るべく早く御申込下さい。

會説

鈴蘭をみて

河井道子

今私の机上に、北海道の野から來た鈴蘭があります。香のたかいこと、青葉にうつりよい白の小な鈴蘭が、羞しげに頭を下げて居ることが、様々の想像畫を私にみせます。其を讀者に御紹介しませう。

今は二昔の其前に「谷間の姫百合」と言ふ小説が西洋小説の中でも若き人々を喜ばせたものでした。何しろ書名が美しいので、内容如何は記憶しませんが、可成好評判で、其から何の區別もせず、小説を耽讀した結果、百合の如き清き處女心を汚れに渡して物知り顔をするやうになつた女學生が當時増加したのは事實であります。英語のリリス・ヲブゼ・ヴアーレ、を「谷間の姫百合」とは適譯か如何かは知りませんが、近頃「谷渡り人物」商標つきのヅボン釣の姉妹品の如く思はれないでもありませんので、「鈴蘭」とか「谷の百合」とか申す方が如何にも適當で、簡單で優雅に思ひます。

先日北海道函館遺愛女學校女子青年會から箱一杯に鈴蘭を贈與して下さいました。かの姉妹方が、此花採集目的の遠足で、數日以前から、天氣を心配された事や、當日嬉々とした大元氣で、出掛けられし様子が彩に見えます。「東京には無いから送りませう」とての親切が香となり我々東京に居る者を悦ばせました。其のみならず、此花が届いた爲俄に中歐の教師、學生救助費を作る一策を案じて大膽にもこれを賣り、此花を話題として學生相助くる芳志を内外人に傳へる機會を得、目に見えし利金は五十二圓

相互に得た無形の利益は大したものです。これは北海道の小い鈴蘭が其薫を歐洲へまで送つたと申べきで御座いませう。

西洋の結婚式に花嫁が手に持つ花束の中鈴蘭は特別に珍重されます。花嫁と、鈴蘭とは實にうつりがよいではありませんか。清淨潔白の優しい處女が、汚れなき美しい愛の家庭に入る表示に此以上のものはありますまい。白の禮服に白のベールを被り。此リリーの大な束を手にして徐ろに誓の座に進む花嫁の姿は何とも氣高く、美しき活畫であります。然し近頃は東西共に離婚が增へ、家庭を破壞する不道德の跋扈するを見聞するにつけ、青年女子に切望する事は結婚を重視することです。假令父母でも教師でも親類でも、友人でも不正の結婚を强る者には何處までも反對する丈の勇氣と、明識とを持つことです。愛に不正と申語には意味が廣ふ御座いますが、一言に言ふと、金錢のため、地位のため、情實のために、人物を度外視することです。濃厚な牡丹で、料理屋の百疊敷の床間を飾らんよりは、人目もつかぬ谷間に淨淸を誇とする鈴蘭たるを選ぶべきが信者處女の求むべき道であります。鈴蘭は床間の挿花にはなりませんでも、病人を慰め、家庭をよろこばせ氣の餓えたるものに神を知らしめる花であります。かの露國で革命の祖母さんと言はれた婦人がシベリヤの寂寞な荒野に放逐され、十ヶ月間風雨氷雪に閉鎖れ、僅に二ヶ月の夏を迎へても警官の監視きびしくして、外出の出來ぬ時に、若き友人が野山に咲ける花束を贈りし其中に薫床かしきは鈴蘭にて、其花がいか程か囚はれの身を慰め、喜を與へしやは我等の想像以外です。小な穢しい土小屋の中に肉付き豐な表情に富む白髮の老媼がリリーの束を握り飲然たる姿、これも亦立派な活畫であります。

聖書には百合花をよく引用して居ります。これは大なものか鈴蘭かはよく存じませんが「シャロンの野花、谷の百合花」と申す句がキリストを代表して用ゐられたり、讃美歌では「峯の櫻か谷の百合花か」

と申して賛辭に用ゐられてゐます。兎も角、味ひある詩的な引用語と存じます。

「また何故に衣のことを思煩ふや野の百合花は如何にして長つかを思へ勞ず紡ざるなり、然るにソロモンの榮華の極の時だにも其裝この花の一に及ざりき」とて、キリストは我等の衣食住にのみ齷齪とした信仰のなき物質的の生活を戒めなされた事は、常に留意すべきであります。神に任せて其境遇に於てベストを盡す人、僞のない人、思はせぶりをせぬ人は他からみると實に美しいものである、恰も幼兒が自身では可愛らしいとは少しも知らぬ其點に可愛らしさがある通り、態と言行を飾らぬ人、外形をつくらはんと心を碎かぬ者は百合花の如くに美しく赤子の如くに、愛すべきであるとの敎です。己が人望とか、學問とか、位置とか、美貌とか、家柄とかを誇らんとするものは、此聖句を尙更味ひ、眞の美を得る樣に救はれねばなりません。

實に小な花一つにも無量の意味が含まれてゐます此意味を深く味ふ人は其丈詩人に近く、神に近いのでせう。テニソンは申してゐます。

「石垣の破目に咲きし名なし花
我は根より汝をひきぬきて
掌中にのせて眺むなり
小さ花よ、我汝全部の何たるを知らば
神と人とを知り得べし」

勿論私共は皆博物學者にはなれません。たゞ此詩人の歌ふた意味に於て自然界を理解することが多少は出來ます。七、八兩月は野に山に、川に海に、天に地によき友人を見出だす好時季であります。古の聖書の歌人等と共に天と地と其中に住めるものは皆神のもの神の力なりと心より歌ふ樣にしたいと存じます。此心が眞個にあれば今日の樣に綱紀振肅など六ケ敷い事を口にして個人の亂調、社會の腐敗を咎める必要も自ら消滅すると信じます。一本の草花にも涙以上に深いものありと言ひし詩人の心、キリストが野の百合花を金門玉殿以上に貴まれ愛でられし其御精神を私共のものに致度いと存じます。

神に委せて

富永德磨

汝等の父は求めぬ先に汝等の必要なる物を知りたまふ（馬太傳六ノ八）

此の天地の間には自然の法則のみならず、又人の心のみならず、神の心が流れ行はれて居る。人類の全體が欲することでも神の心の壓迫に内々成し遂げられぬことがある、人類の誰も願はぬことでも神の心の刺激に由て着々と行はれて行くことがある。人類の歴史は此の人間ならぬ神の心に内々導かれて來た歴史である。若し世界に人の心のみが働いたならば、人類は人間の慾の導く所に流れて行き、到底向上の歴史を造ることは出來なかつたであらう。ウエルスも左様いふ意味のことを説いて居る。以前にはサバチエも左様いつて居る。實に世界には人間以上の神の心が行はれて居る。神が働いて居る。實は自然法も神の心に由り人も神の心に導かれて、動いて居るのである。此の神は何者であるか。基督は之を直觀して父と知り玉ふた。

基督は此の人間以外の力が御自分を助け又は妨ぐることを知つたのみならず、自ら此の力のみに由て動いた。基督は自ら省みて己の内に人間界よりならぬ心が湧き上つて抑ふべからざるを見た。人類をばこうしても幸にせねばならぬ。神の子供にせねばならぬといふ熱情は基督の内に火の如く燃えた。彼は人々の大群を見て其の並べる顔に飢ゑたる色を見た牧者なき羊の而を見た。彼は人の愛すべきものなるを見た。彼の目には愛と憐れみの涙が一杯であつたであらう。彼は時として之を自ら意識して其の人間

界のものならぬを感じ、此れ神の心である、神が我内に在て思うて居るのである、感動して居るのである意志して居るのであると覺り、人にもさう語つて一死何かならんといふ勢を以て此の意志を果すに突進した。

基督は又自分の外に愛の神の力が働いて凡てを導いて居ることを見た。空の鳥を見よ野の百合を見よ何の思ひ煩ひもなく何の不自然なる努力もないが、然し自づからにして生き自づからにして装を凝らして居るではないか。一羽の小鳥も父の許しなくば地に墜ちぬではないか。凡ては恵の攝理である。我が來るも神の國を立てんため、罪ある者を招きて悔い改めさせ神の國に入れんため、我が死ぬるも多くの人のため生命を棄て其の贖とならんため、即ち世界の裏なる無限神の心の流れ出たものと言つた。

基督は自分の内にも外にも神の力神の心が充ち滿ちて凡ては其の心の成る如く成つて居ると感じた。而して其の心は自分の内に働く所を以て見ても外に働く所を以て見ても全く慈愛の心である父の心であることを覺つた。彼は茲を以て安んじ喜むで全く之に委せたのである。ゲッセマネの惱みの中にも汝の御心のまゝになし玉へと祈り、十字架上の最後にも父よ我が靈を汝に托すと呼はつて息絶えた。

實に人間以上に働いて吾人の運命を導いて居る力は愛の心である。さらば吾人は之に委すべきである。若し人がどこまでも自分の力で事を成し得るものであるならば、一から百まで皆な自分が脊負つて心配すべきであるが、人間はそんなものでない。人の力は直ぐ行き詰つて仕舞ふ。例へば病氣にかゝつても淺薄な人々は人間の力で其が治るかの如く考へて居る。そこで醫者よ藥よと成金振を發揮して、其で治さずに已まうかと意氣ごむで居る。然し醫學上源の分つた病氣はまだ少い。分つても直接に其を治す藥は二三種より外はない。名醫は自らの力の極めて微なことを知つて居る。彼は謙つて唯だ神が人の體に備へてある自然恢復の力を待つのである。萬事

之と同じ。

されば自分は人間の能ふだけのことをするは可いが、自分で凡てをせねばならぬものゝ如く、神ないかの如く、あわてあせり、いらだつてはならぬ。神の働く所を人間が神の手より引き取つてまぜかへし却つて禍に陷ることも少くない。病氣に罹れば彼の醫者に見せ此の醫者にかゝり、廣告の賣藥を五つも六つも併せ用ひ、山に行き海に行き、自彊術に行き、斯くして到頭身體をいぢり崩して仕舞ふ。精神の事にもそんな事が多い。どうも自分の惡い癖が直らぬなど言て、禪に行たり淘宮に行たり方々を持ち廻る者がある。勞して何の效はない。何か失敗でもあると心忽ち顚倒して仕舞つて色々と焦心する。或は他人の精神についての心配にしても、あまりに苦にしすぎ何所までも人間の力で處置しやうと思ひ煩ふ。皆な過つて居る。

其よりも神に働きの餘地を與へて神に委せるのが眞である。人は時として手を引いて神から働いて戴かねばならぬ。吾人の生るゝも自分で生れず死ぬるも自分で死ぬるのでない。一切は神に依る。病氣になつたら神に委せるがよい。もし生くべくは生くるべし、若し死ぬべくは死ぬるのみ。誰か能く思ひ煩ひて其の生命を寸陰も延べ得んや。或は財産や地位の安全を脅かされる場合でも、自分一人で頽瀾を回さんとするならば、何程足掻きて悶えても甲斐はない却つて罠にかゝつた獸の如く益々禍の網にまつはれて仕舞ふ。主よ御心を成させ玉へと委せて、神の爲すを待つて居れば、波は引き去り罠は解けるのである。人は態々死を欲するを要せぬ、又どうしても生きて居らねばならぬと定めても不可。貧乏であつてはならぬと踏張ると無理が出來る。貧乏でなくてはならぬと定めても不自然になる。結婚しなくてはならぬときめて居ると徒らなる思ひ煩ひが起る。獨身主義だなどと主張するもまたいらぬこと。一生どんな仕事をしなければならぬ、どんな身分にならねばならぬといふやうな事も、判を押したやうに定める

要もない。吾人は何もそんな約束を前世から持て生れた身ではない。人間として達せねばならぬ目的を立て、即ち神の子たる實を完うしやうといふ所が立て居らばそれでよい。餘は一定の方針に向って努力して行くもよいけれど、あまりに固執し拘泥して焦心し思ひ煩つてはならぬ。神に委せて居れば丁度よい所に持て行かれるのである。

　自分の精神についても餘りに思ひ煩つてはならぬ。吾人は罪の多いものである。けれども天父は悔い改むる者を赦すと基督は告げ玉ふた。吾人の身を其のまゝ神の前に投げ出すが可い。神は罰し玉ふであらうか。罰し玉ふならば甘んじて罰を受くべし。神惠み玉ふならば惠みにて生くべし。吾人の内に膠漆の如く着いて居る舊い罪のことも、いらつて其を夷げんとして苦心すると却つて靈を傷ふ。唯だ神の獨子たる耶蘇を見入つて、其の美はしく輝ける愛の德に憧れ、其の瀧の如く流れかゝる感化に靈を投げ出して置くが可い。いつの間にか神の惠は溢るゝばかりになつて居るを見出だすであらう。

　夫のこと妻のこと、子供のこと友人のこと又餘りに心配すな。傷を眺めて弄つて居た所で癒えはせず却つて痛み多く傷口は擴がる。其よりも靜かに神に委せて置けば回復するのである。對手の人の靈を愛し、其の立派にならんことを一生懸命に祈り、絶えず此心で包むで居るならば、神が手を伸べて其のわざを爲し玉ふ。必ず其人は救はれる。

　人生には惱みが多く危險が多く又吾人の願ふ所も多い。憂ひと思ひ煩ひとの種が充ちて居る。若し人のみの世界ならば何事も自分で心配し底まで自分で仕とげねばならぬ。然し神がある。神の愛が働いて居る。吾人は自ら出來るだけは盡すが、結局は神に委せねばならぬ。此れ平和の原にして又幸福と發展の途である。

× × × × × × ×

that if he works faithfully on the pattern, and is careful of all the different threads that the finished work will be good. Sometimes from the side on which he is working he sees only dull and rough threads, with little promise of the beauty of the cloth. But into it all, day by day, he puts the tiny threads, knowing that he is doing his master's work.

What did I put into my weaving today? A song in the morning, a prayer to be brave and sweet for the day, a happy thing to share with my friends, and honesty and a faithfulness in my work, in the little things that none will ever see? Oh! how many weak places we let come into our pattern because we get discouraged, because we scorn the littleness of the task, because we long to do great things! Will the Master, looking upon the work we have done, say, "You have been faithful in the little things, I will make you ruler over many things?"

This is my work, my Father, help me today to do it well. In the secret places of my heart guard the little things. Guard my lips, that the little things I say may not spoil or hurt somebody else's day, nor be in the tiniest way dishonest or insincere. Guard my hands, that in the little things I do, I may not be careless or thoughtless. Guard my mind, that in the little things I think I may not be harming the gift of thinking that Thou hast given me. Guard my heart, that all the little dreams and longings and desires may be sweet and pure and good. Our Father, look upon Thy little children seeking Thee, and help us to learn to love one another, and to learn how we may build the great spaces of beauty and of wonder in our lives, and yet make perfect the "little things". Amen.

He not expect every one of us to be perfect in the place in which we are-in the little things? Jesus does not say "Be great, do great things", He says, "Love and be perfect." Not perhaps doing perfect things, for we cannot always know what we must do, and we will make mistakes, but trying, enduring, helping, loving, being, that is what He asks for. Have you, have I been perfect in the little things today, or have we, thinking that they were not worthwhile, spoiled the beauty of the whole day?

There was once a wise man who had three jewels which he was going to carry as gifts to the Great King. He had to make a very long journey, and he started quickly, so that he could present the gifts at once to the little baby, Jesus. But on the way he found many things to delay him,- a sick man who needed care, a child who was lost, a mother who needed to be protected from cruel men, and he could not go on without stopping to help, even when he had to sell one of his jewels to buy food for those who needed it. So it was a very long time before he found the King, and he was very sorrowful because he did not have the great gifts which he was planning for Him. At last he heard where the King was, and was going to him, when a girl cried out to him to save her from the men who were, pursuing her, and hegave his jewels to the men to make them let her alone. Alas, now he had nothing for the King! But when the King saw him, He knew, and He said that his gift was a very precious one given directly to Him, "If ye have done it unto the least of these my brethren, ye have done it unto me". So not in the gift that had seemed great to the wise man, did he please the King, but in the little perfect things that had seemed to keep him from the thing he wanted most of all to do.

When a piece of tapestry is being woven the weaver cannot see the work he is making. He knows his pattern, but he only knows

英　文　欄

THE LITTLE THINGS

If you will come with me into the country, I will take you to a lonely gnarled pine tree on the top of a hill which is like the top of the world to me. Underneath the tree is a nice level place where you can sit, and from there you can see the world spread out before you. Faint grey mountains with a little edge of grey sea beneath, then more hills dark with trees, a level plain, shining with the square mirrors of the wet rice fields, and over there the moving waves of a wheat field, "knee-deep in June". You will rejoice in the wideness and beauty of the world, and it will make you think of the greatness of it. and of your own littleness.

I sat there one day, looking out and idly plucking the grasses and weeds at my feet. Once I looked down and saw that I had picked a tiny white flower from a bush very near me. I saw the whiteness with the little flush of pink deep in the heart of it, I saw the perfection of the tiny pistils and stamens, and knew there was much that I could not see but I knew was perfect too. This little tiny flower that no one would appreciate unless like me he idly happened upon it, was perfect, and the next was going to be perfect and the next. What for?

The mountains, the hills, the sea, the stars and the clouds; the tiny flowers, the birds and the bees, the smallest pearls and diamonds,-little things, but perfect;-all this is part of the love of God. Not only the bigness and the vastness, but the little things that may never be seen-these are part of God's love.

Not only the great and the noble and the fine men and women, but the poorest and weakest and least of us are loved by Him. Does

プレシコフスカヤ抄譯（抄譯）（六）

森田松榮

「シベリアの冬は、寒暖計が零度以下五十度まで降り、カラでは冬が八ヶ月に及ぶ。氷の張らない夜は二ヶ月しかない。監獄には、害虫が文字通り雲集してゐた。壁にも、床にも、寢臺にも、ベッタリたかつてゐた。三ヶ月といふもの、我々は寢臺につかずに、一心不亂に虱と戰つた、遂にすつかり退治して了つた」。と彼女は云ふ。なほ續けて、

「我々の食物は少しのパンと、スープの材料にする一ヶ月十二斤の肉とであつた。肉はどす黑くていやな臭がした。野菜は丸つきりなかつた。

「私の仲間の女囚は、多くは貴族出の、若い婦人でいかにも氣持ちのいゝ、卓越した人達であつたが、華奢に育てられてゐたものだから、こんな艱難に堪へる丈の力がなかつた。彼等は一人づゝ病氣になり壞血病で、身體がどすぐろくなつた。

「野菜を貰ひたいと嘆願した結果、到々藷――といつても、藷ではなく、莖で、薄鹽に漬けて、家畜の飼料として、秣室に詰めておくもの――を食べてもいゝと云はれた。我々は三四日、スープに藷の葉を入れて見たが、どうも食べられなかつた。………………私の仲間はつぎ／＼に死んで半數になつて了つた。

「三年間、我々は一度だつて戶外の空氣を吸つた事はなかつた。我々は絕えず虐待に反抗してゐた。一度騷ぎをやつた後、我々婦人は、食物に觸れずに、九日間といふもの、一列に死人の樣になつて臥てゐたが、到々、看守から確かな約束を獲得した。この饑餓同盟は幾度もやつた。これを妨げる爲に、我々は、屢手足を縛られて、コサック兵に、無理やりに

咽喉に食物を押込まれたりした。」

カラ礦山での刑期が滿ちると、カザリンは支那國境のセレンヂンスクにやられた。カラから其所までは一千哩の旅であつた。一行中婦人は二人で、男子は約百人、其中の多くは普通（政治でない）犯人であつた。

以下は、セレンヂンスクでブレシコフスカヤに會つた、ヂョーヂ・ケナンの記事である。

「彼女は卅五歳位でもあつたらうか。美人ではないが、凜とした聰明な顔と淡泊なうちとけた態度と、暖かく強くひろい同情心とを有つてゐた。彼女の顔は幾年月の艱難のあとをとゞめ、礦山の監獄で刈られたその黑く波うつ澤山の髮には、そこゝに、白いすぢが見えた。然し、艱難も、追放も、懲役も、彼女の勇敢な、美しく調和された精神を碎いたり、特權と義務とに對する彼女の信念を搖がしたりすることは出來なかつた。私はぢき知つたが、彼女は敎養の深い婦人であつた。彼女はフランス語、獨逸語英語を話し、又音樂家でもあつた。あらゆる點に於て、人を牽きつける興味のある婦人だといふ印象を私は得た。彼女の通信は檢閲された。彼女は家族からも友人からも、生きてゐる限り離れて了つてゐる多かれ少なかれ、艱難と窮迫との數年と、やがては、彼女の死をしるす飾のない木の十字架に、同情の眼のとまるよしもないセレガ河のほとりの淋しい墓場人の埋葬とのほか、前途に望むものは全くないと、私には思はれた。この不運な婦人が、そのわびしい將來をつく／＼思ひながら、小搖ぎだにしない勇氣と、故國の自由の最後の勝利を斷言する信念とは雄々しくもまた傷ましいものであつた。彼女が私に語つた次の言葉は彼女の最後の言葉であらう。

「ケナンさん、我々は流刑のうちに死ぬかも知れません。又我々の子供達も流刑のうちに死ぬかも知れません。それから子供の又子供達も流刑のうちに死ぬかも知れません。けれど、おしまひには、それから何かゞ出て來るのです」

「私は右の會見以來、ブレシコフスカヤ女史に會ひもせず、消息もきかない。けれども私は、彼女が最後に私に云つた言葉を憶ひ出す度毎に、勇氣と堅忍と、雄々しい犧牲とに對する、あらゆる自分の標準が、一婦人の手によつて、絶えず高められてゐることを、いまだ感じない時はない。」

彼女がセレンチンスクで過した八年は、シベリアで彼女が經驗した懲役中で一番つらいものであつた。折々、一二の政治流刑囚が、二三週滯在することはあつたけれど、ふだんは數人の土人のほかに話し相手はなかつた。寒暖計が零度以下二十度乃至五十度の冬には、彼女は椅子を煉瓦のストーヴの上にのせ、頭を茅葺に擦れ〱にしてゐた。彼女は今もなほ、セレンチンスクで罹つたひどいレウマチスに惱んでゐる。彼女はいふ、

「政府は私に月六弗給與しました。家賃が五十錢、薪が一圓五十錢、食費が四圓でした。國元の人達からも金を送つてくれましたが、勿論それはカラの同志におくりました。ごくたまに、同志が出した多くの手紙のうちから、一通が――時には帽子の裏に縫ひ込まれなどして――屆きました。孤獨から、氣が狂ひさうになることもありました、それで精神錯亂を免れる爲に、雪の上に馳出して、決して喝采することのない荒寥たる風景に對して大聲で熱烈な演説をやつたり、オペラをやつたりしてゐました。

「もう一度奮鬪するため、どうでも脱獄しやうといふ一念で、私の心は燃え立ちました。私は籠の中の鷹のやうに衰へました。一日として脱走を思はない日はなく、どんな危險でも冒さうと覺悟しました。しかし事は到底不可能でした。セレンチンスクに於ける八年の空つぽな年月は、私の記憶にも、灰色の虚無としてとゞまつてゐます。

「同志の苦難を思ふ心ばかりが、自分を忘れさせました。暗黒な牢獄で、雪に閉された荒野で、餓えて、人から忘れられてゐる同志に私の稼いだ金を送ることが出來るやうにと、私は働きづめでゐました。私

は人類が如何に生息したか、どこまでそれを變化し得るかを知るために讀んだり調たりしてゐました。」

やがて彼女は「自由流刑囚」となつて、シベリア全部の旅行劵を下附された。彼女は隨分健康を損じてゐたが、ぢきに强壯になつた。シベリアに於ける刑期の最後の四年は、町から町を經巡つて、老若の民衆と語り、革命の準備を彼等にすることに過ごされた。イルクーツク、トボルスク、チウメン等、彼女の逗留した所には、何所にも、彼女を中心として決死の革命主義者の一團が生じた。

彼女はなほも根氣よく、國元から送つてくれる金を、自分よりも窮してゐた人達に與へてゐた。時々、籠の中には幾百ルーブルもありながら彼女は（彼女自身の言葉を使へば）、「犬のやうに飢へて」歩き廻つたのであつた。彼女は、誰かゞ、一杯の茶か、少しのパンかを呉れさうなものとの、ひそかな望みを懷きながら、町を歩いて友人を訪問してゐた。彼女は裁縫して稼いだいくらかの金をも、カラに送つた彼女は窮乏に馴れて、平氣になつた。

彼女の流刑期が終りに近づくに從つて、ロシアからの政治流刑囚の行列が增して來たので、彼女は革命主義者の働きが擴がつて來たのを知つた。彼女は數百の同志と共に、將來奮鬪を繼續する計畫をたてた。一八九六年、刑期滿ちて、彼女は故國に歸つた。

ロシアに歸つてから、彼女は、親戚や昔の友人の訪問に三ケ月を費した。彼女が驚いたのは、生殘つてゐた姉が、彼女よりもずつと年をとつて了つたことであつた。旺な精神的職業と興味とは、非常な艱難の下にあつてさへも、逸樂奢侈の生活よりも、保健上遙かに有效だといふ結論に彼女は達した。彼女は、姉の家族に就て左の如く云つてゐる。

「彼等は自分達の珈琲の心配をする。庭の心配をする。何でもかでも心配する。私は三十年間、行李一つ有たなかつた、然て何に就ても心配しなかつた。」

チャイコフスキは左の如く書いてゐる。

「プレシコフスカヤが私達と宿つた時、私は彼女の

この世での所有物一切を入れた小さな手提鞄を見て男や女がひどい目にあつてゐるのに、ただ一身の慰安を重要視する自分を恥ぢた。」

彼女の息子は親切ながら保守的な親戚に育てられて、母は死んだといひきかされてゐた。貴族主義の思想に教育された彼は、母の目的に何等の共鳴もなかつた。彼女は彼と一度會つた。それから、これが生き別れか、それとも、革命の來るまでか、と思ひながら別れた。なぜなら、彼に政府の嫌疑をかけずには、彼女は彼と通信を續けることが出來なかつたからである。

彼女は同志の殘徒をロシア中にさがした。生殘つてゐた舊い同志の姓名や宿所簿すらも有たなかつた。彼女は時と忍耐とを以て、彼等を糾合して、直ちに農民を團結させる昔の仕事を、新らしく始めた。彼女は農民の非常な變化を發見した。彼等は廿年以前よりは、更に一層悲慘であつた。然し彼等は亦ずつと聰明になつて、革命に對する準備は殆ど出來てゐた。彼女は云ふ

「私は再び旅行をし始めた時、直ちに非常な變化を認めた。私は旅費を有つてゐたから、もはや歩かないで、十倍も多く旅をすることが出來た。六年といふもの、鐵道が私の家であつた。夜は河上のボートの上で、市の共同家屋で、農民の小屋で、森の中で私は集會をした。けれども昔と違つて、誰かによつて、私の前に、道はいつも準備されてゐた。私は絶えず保護された。」

秘密に團體を編成しながらも、彼女は本名を名のつて、數年間公然旅行をした。やがて睨まれてゐることが分つたので、彼女は農民に變裝して、猶數年仕事を續けてゐた。

政府はあらゆる努力をして、彼女を捕縛しやうとしたが成功しなかつた。農民は彼女を愛し、彼女をかばつた。彼女は幾度も危機一髪の急場をのがれた一度などは、彼女が停車場にゐた時、警官はありつたけの扉を警戒して發車毎に彼女を見張つてゐた。

待合室で彼女は尼と尼長との一團と話し込んでゐた尼長は彼女に心を牽かれて「尼寺に遊びにいらつしやい」と云つた。彼女が尼の一行と、嫌疑も受けずに、停車場を去つて、尼寺で數日暮してゐた間、警官は空しく市中に彼女を搜索してゐた。

　或時は、警官が、彼女が友人を訪問してゐた田舍家を取卷いた。丁度料理人の外出日であつた。彼女は料理人の衣服をつけて、警官が家宅搜索してゐる間、晝飯を料理しながら、臺所に立つてゐた。

　又或時は、革命實際運動家であつた十七歳の少女とキエフに逗留してゐた。少女は警察から密偵を附けられてゐた。二人は少女の小さな共同部屋に眠つた。窓で張番をしてゐた密偵達は、誰かが少女と一緒にゐるのを見てとつた。翌晩いきなり憲兵が來て戸を叩いて、

「あなたと一緒に眠つてゐるのは誰だ？　何故警察に屆けないんだ？」

と云つた。折よくカザリンは外出してゐた。少女はひどく恐怖したが、

「私のお祖母さんが逢ひに來ただけですよ」

と、うまく返事をしおほせた。憲兵が出ていくのを待つて彼女はコッソリ雨の中を出て、秘密集會でブレシコフスカヤを見つけた。彼女は出來事を話して叫んだ。

「おばあさん、お祖母さん！　あの人達はあなたのあとをつけてます、つけてます！」

「心配なさるなよ」とブレシコフスカヤは云つた。

「あの人達が私だと疑つたのなら、戸を敲き壞していきなり踏み込んだでせう。あなたの所に誰か泊つてゐるか知りたいだけなんですよ。」

　彼女の同志は、即時に、絹布や流行の絹布で彼女を裝はせ、高貴の婦人といふ風采で、停車場に彼女を馬車で送つた。

　後に、彼女がアメリカにいつた時、金持の婦人が美々しい衣服をトランクに一杯つめて、彼女に贈つた。彼女はそれをもてあましたが、いつか變裝の用

にでも立つかも知れませんねと云つて受けた。この言葉は、折角の贈物がはねつけられさうなので、すつかりガッカリしてゐた婦人の、やさしい心をよろこばせた。

やがて社會革命黨が生れた。プレシコフスカヤは領袖の一人であつた。その黨員等は、ロシアの一億七千萬の人口中一億四千萬を占めてゐる農民に、おもにたづさはつてゐた。革命による自由は、彼等の喊の聲であつた。

一九〇〇年、政府は全帝國の警官全部に、三人の革命領袖—プレシコフスカヤ、ゲルシユニ、及びメルニコフ—逮捕の一般命令を發した。此時には革命團體は既にロシア全土に出來てゐた。瑞西及びロシアに於ける澤山の秘密出版局は、日夜働いて、どし〳〵革命文書を出し、それを「地下郵便」はロシアの隅から隅まで運んでいつた。社會革命黨は、舊い學課—土地は民衆に所有されざる可らず、ザーの政府は轉覆されざる可らず—を農民に敎へてゐた。無用な危險を冒さないやうにと、同黨の中央委員はロシア全土に離散してゐた。其會員は滅多に會はなかつたけれど、州委員會を敎へて、絶えず事業を計畫し指導してゐた。州委員はまた、敎へられた言葉を小さな地方委員會に傳へ、それからそれと、田舍家や市の共同家屋で夜集會してゐた農民や勞働者の數千の小團體に傳へてゐた。領袖達は絶えず團體間を巡つてゐた。一人が捕縛されると、すぐ他の者が代つてした。一九〇三年彼女はいふ

「社會革命黨は、一大災危に逢ひました。大仕掛の捕縛と捜索とは、その指導人物、其最上の出版局、文書等を澤山奪ひ取つて了ひました。一切を復舊しなければなりませんでした。此時には、既に、我黨の才幹あつて熱烈な移住者のおかげで、黨の事業は外國 堅固に發達してゐて、彼等は黨の機關紙や、通俗な書物や、小冊子の出版に全力を傾注してゐました。

「此等の若い人達を故國ロシアの實際運動に召喚す

る爲に、私は始めて海外に行きました。一九〇三年五月オデッサで乘船し、ルーマニア、ハンガリ、弗エナを經て、巴里、倫敦、瑞西等に分散してゐる黨員の中心地なるゼネバに行きました。この會議には昔一緒に奮闘した同志達が、參加しました。

「若い人達は、我々の集會に出て、熱心に聽いてゐました。我々の中央機關紙の主筆(ケレンスキー内閣の農務大臣)チエルノフは昂然として、黨の地位を擁護しました。私は、實際の仕事を確かり摑むこと、農民と勞働者との間に、我々の思想を宣傳すること、あらゆる團體に、舊制度に對して戰ひ得る準備をさせ、自由なロシアの爲に、一身を拋つ覺悟をさせることの必要を切言しました。

「かくして、青年男女は、我々の文書を携へて、續々ロシアに歸り、「戰爭に於て、汝は汝の權利を獲べし」といふ小册子は、祖國全土に撒布されました。若いロシアの團體を指導するこの仕事に、丸二年かゝりました。」

タゴールの中より

「不淨の手から施物をうけるな。唯だ聖なる愛の手から惠物を享けよ。」

○

「澄み渡つた理性の川が廢頽した慣習の寂しい沙漠の裡に流を奪れない所、其處に不斷の活動と思索がある。」

誠の美（ゴールデントレージユアーから）

薔薇の頰を愛し　珊瑚の唇をほむる者は
星のひとみより　己が火の燃料を尋ねる者は
老いて衰へなば　彼等の焔も消えやう
平な確乎した心　優しい思想おだやかな望
公平な愛に繋がりし心ぞ　消ゆる事なき火を輝す
これ等のあらぬ　美しの頰も、唇も、眼も
私は蔑視しむ。

超越

（ロバートブラウニング譯詩）

岡崎小文

詩人よ君の樂手をお止め
君の兄弟に話させておくれ
君の散文的の話それが誤なのだ
歌が私どもの藝術
だのに貴方は見聞くものを
調べに織出さうとはしないで
赤裸の思想の表現を喜ぶ
眞實の思想、善い思想、蓄へるのに應しい思想
だがどうして斯樣に長い前置と虚飾をするのだ
とつかうつ廻して漸く琴の調律
そしてそなたの胸に取り糸を洩るゝは
味もない散文が語り出されるばかりなの？
たゞ哲學的思辯が求められるばかりだ

散文を聲高に手笛してお語り
どよめきが歐土に響き渡るまで
木の皮でまかれた六尺のスイス笛
アルプよりアルプに響き傳へやう
私どもの琴をそれに變へやうか――
誰が貴方をとゞめる人があらふ。

だがね、貴方の誤はこゝにねざす
大人は思想を求めると貴方は思ふ
詩と言ふと思想だと思ひ
詩の中に思想を皆の者は求める
小供は形象と旋律とを追ひ
大人は理究でなければ滿足しない
それで貴方は大人をめがけるのだ。
實に若い日にはうづの思が滿ちてゐる
若し貴方が解きあかして下されば
私共は見ても聞いてもあやしみもしない。
彼の獨のポエーメ一日野路さすらふて

奇しきことの起つた迄
草木に心をとめなんだが
思ひもかけず植物がもの言ふ事を知り初めた
實に解放された舌で彼と語るのに氣がついた
ひな菊は其日はしき瞳を持つてゐた――
九輪櫻とあげつらふた
ヤコブの散文に同じことが見られる。
たが彼の書いたむづかしい書
其散文を讀む間に靑春は稍に衰へる
同じ事を對照訂正し
そして私共の思ひ〳〵に定め込み
思ひあぐんで本を閉ぢれば
靑春はもう逝つて居る。
誰が助けるのだ失ふたつぐなひを
今一人のボエーメ薔薇の語る意味深淵の
もつと難かしい書を持つて――
或はハルパストアドの彼に似た魔術師
ヨハンナはボエーメの書いた思想を手業した

彼は君見給へと詩句の束を賣る
そこに薔薇は花を開いて
私共の上に下に四圍に
實に内外に机にも椅子にも
神秘の詩巻ボエーメのうづの書
とざゝれた生命の奥殿に
再び靑春をそゝぎながら
榮光の中に私達をつゝむ。

琴よ今一度君の胸にお歸り
貴方の詩は數に足らぬとも
貴方自身が詩
至聖の櫃の頂に一對の半月の翼して
神を指すケラブに習ふて
絃にうつむく美しい貴方の幼顔が
貴君の示した何物よりも優れて貴い。

＊　※　＊　＊　＊　＊

ロシアの宗教

H、K、O生

由來ロシャ人は極めて宗教的である、就中農民に至つては特に然りである――彼等は曠々とした天地の間に生れ、自然と共に生き、神と共に働き、共に喜び、共に悲しむ。彼等の生活と宗教とは全く合致して之を離して考へる事は出來ない。故に眞にロシャ人を知り、眞にロシャの政治、法律を、將又文學教育其他有ゆるものを、正しく理解せんとするならば、先づ以て彼等の宗教を知らなければならない。彼等の宗教、宗教生活の眞相を究めずして、之を知らんと欲するのは恰も猿猴の水月を掬んとするに等しいのである。

ロシャ人は生れるや直に必ず洗禮を受ける、そうして聖人の名前を取つて命名される。と云つて了へば頗る簡單の様であるが實際は極めて御念入の儀式がある――赤坊が生れる僧侶を呼ぶ、そして其子の一生の幸福の祈りと、尊き生命を受けた感謝の祈禱をする、名前を附ける、それから御念入の洗禮――洗禮盥のヌル湯の中へザンブと入れて清められる。盥の縁には三本の蠟燭が點燈されてある。次に鳥羽に附けた聖油で十字架が赤坊の身體に書かれ、又祝禱と感謝の祈をして、初めて聖い所謂神に祝福された赤坊が此の世の世のものとなるのである。

かうして世の人となつた露西亞人は年中行事として自分の誕生日と命名の日には毎年親族知巳を招いて感謝の宴をはることを常として居る。朝起きると必ず祈を献げ、食事の折にも仕事の終にも必ず祈禱

する。結婚は勿論聖堂に於て莊嚴なる式に依つて行はれる。旅行に出る時出征する時も聖堂で先づ祈禱して出掛ける。各個の家には必ずキリストと聖女の畫像を祭つて居る。而して如何なる僻地の寒村を訪れても、きつと十字架を頂いた神々しい聖堂の甍が旭の光に燦然と照映えて居るであらう。如何なる茅屋のある所にも、不相當に飾られた禮拜堂が碧空に高く聳えて居る。ロシヤの聖堂、寺院は日本の小學校の數よりも多い、全國の大小の聖堂は實に八萬近くもある。而して每週土曜、日曜には必ず部落の人々が集つて祈禱する。ロシヤにはわけて多い祭日祝日にも此處に寄るのである。戰あらば勝利を祈り、勝たば戰捷の感謝の祈禱を捧げ、危篤の人あらば忽ち平癒を祈る、又家を新築すると聖式を擧げるのである、田園の種播きにも、先づ祈つて之を播く。收獲に當つても先神を祭り感謝の祈をする。如斯く彼等の年中行事、彼等の日常生活は宗敎と頗る密接な不可離な關係を有して居る。中にもクリスマスとイースターの賑ひは格別である。イースターの前所謂キリストの受難の一週の間、其處此處と全國到る所の聖堂の淸い鐘の音は響き渡るのである。其鐘樓より漏れる鐘の音はゴンーゴン……決して我國の夫の樣に諸行無常を告げ渡るのではない。萬は復活せんとする希望と光明に滿ち〳〵た福音、嬉しき音信である。此の喜しき音信を聞く時、如何に靈に冷えた者でも、墮落の淵に陷らんとする人でも忽ち尊く淸き聖堂に集つて靈に甦るのである。

ロシヤの聖堂は部落都市のみに限られない。到る所の學校、兵營、軍艦の中にも設けられてある。小學校へは日本と同樣に七歲頃から行く、(中流以上の子供は多く家は雇れた家庭敎師に習ふのが常である)卒業すると中學女學校、其上には大學がある。是等の學校に於ては每日授業の始る前に全校生徒は集つて必ず祈禱をする。而して宗敎科が正科の一つとなつて居て僧侶が之を敎へるのである。

ロシヤ人は面白い國民である、何か事があると記

念の聖堂を建てるのを常として居る、嘗てアレキサンダー二世がカラムゾフに狙撃された彼のネバ河畔のサムマー公園の正門にも、今尚禮拜堂が其跡を殘して居る。又皇帝が暗殺せられた地點にも、金碧燦爛たる大伽藍が建てられて露都の名所の一に數へられて居る。廢帝ニコラス二世が、皇太子であつた時日本に遊び近江の御遭難記念にも到る處に禮拜堂が設けられて居るさうである。近くは伊豫の松山市にもロシヤの俘虜の埋葬記念として遠き異國にさへ聖堂が建つて居る。

　ロシヤ人は如斯く神と共に生れ、神と共に生活し神と共に働き、共に喜び、共に悲しむのである。彼等の生活は祈禱に始まりて祈禱に終る、否ロシヤ人に云はせると、彼等の肉は死すとも、其靈は永存して居るのである、それ故彼等は毎年一定の時日には必ず集ふて死者の冥福を祈る事を常として居る。ロシヤ人は如斯く徹頭徹尾宗教を以て終始するのである。之が彼等の自然性であり、國民性であつたのである。

　然るに漸次入り來る西歐の物質文明、唯物思潮の爲め此美しい國民性は傷付けられ、恰も我日本に於ても戰時中人皆爭つて實業界に走つたが如く、ロシヤに於てもインテリゲンチユアの間には、信仰を喪ひ却つて之を輕視して、物質文明に心醉する者も少くなくなつた。さらば心ある者は之を憂ひ、歐洲大戰前既に宗教界の革新を計り、全國正教會大會準備委員會を設け、嘗てペテロ大帝が改めて、自ら酋長となり、宗教上の有ゆる權限―禮拜敎儀のみ除き―を一身に收めて以來存續した此の制度を廢して元の總主教制度に復活して、政治と宗教の分離を計らんとして居たのである。

　而して大戰となるや、此革新運動は一時中止の止なきに至つたが、併しながら這般の大戰に於て無邪氣なロシヤ人は、黒海の南門たるスラブ民族の聖地久しい間盡きぬ怨を呑むで異端者に委ねられて居た聖地ビザンチユウム即ち今のコンスタンチノプルの回復を夢見て多大の希望と光明に滿ち〳〵て居たのであつた。而して此希望は計らずも千九百十七年三月の大革命勃發と共に南柯一炊の夢と消て了つた。

夏期修養會の思出

山の手の思ひ出

○○○生

愛する皆様、又夏が參りました。本箱の青いとばりを開くと「山の手町より」と記された一冊のノートブックがなつかしく目にうつります。

去年の九月、學校が始つて寮に歸つた時、皆さんから「修養會如何で御座いまして？」とお尋ねを受けた時「唯もう感謝でした。是非來年は皆さんゐらして下さい。如何しても一度はいらして下さいな。」其時の私には唯さうしたお返事より何も言へませんでした。あれもこれも申し上げやうと思つて歸つて來ました筈でしたけれど……………。

おど〱した氣分で「女子青年會夏期修養會々場」と記されたフエリス女學校の門へ疲れた身體を運んだ時、青草のローンに身を横たへて樂しさうに語つてゐらした方のお一人が、逸早く私の姿を見つけて跳んでゐらつしやいました。そして其美しい人は私の耳にかう囁きました。さぞお疲れでせう、よくゐらつしやいましてね。」そして私の汗ばんだ手から重いバスケットを取つて先に歩み出しました。永年望んでゐてやつと叶へられた夏期修養會に田舍から出て來た私に與へられた處の最初のなつかしいそして嬉しい印象はこれだつたので御座います。希望と感謝に滿された朝な〱お姉様とお呼びしたいやうな肩揚の無い方許りの間に交つて、東から西から集つてゐらした各女學校の方々から色々有益な支部の御活動振りも敎へて戴きました。その美はしい御人格に、お言葉に、陰乍らお慕ひ申し上げてゐた先生方

のお話を親しくお伺ひする事も出來ました。お部室同志で致します夜のお室會や、早天祈禱會では皆さん方の祈りに滿ちた信仰の御經驗談、信仰上の惱み寂しさ等を語り合ひました。共立女學校の寮舍に初めて宿つた其夜から自分の家の樣な氣分で、元氣な神戸女學院の皆樣と騷いだり、お集りの濟んだ後で明るく灯のともつた港の街を故郷を想ひ乍ら歩いたのも嬉しい事の一つで御座います。どんな悲しい事でも返らぬ過去は永却なつかしいもので御座いますまして、あゝした美はしい若い姉妹方の清い集りが如何して忘れられませう。月の美しい夜に遠足もしましたつけ。ミスペーヂから山の手の日光御殿のお話を伺ひ乍らよく往復した路も忘れる事が出來ません。ホームシックを起してお部屋の御姉樣を困らせた事も御座いました。然し豫定の一週間も過ぎ、最後の送別會の夜、主の御名に由つて集り、又別れて行く一人〳〵をどんなになつかしく見送つた事でせう。

「もつと殘つて居たい。」さうした寂しい氣分の中にも各々が偉大な決心を持ち、希望と感謝に滿されてあの山を下りました。「爾曹互の勢を任へ斯くしてキリストの律法を全うすべし。」の標語のもとに、かうした喜びを忘れぬために記された事々、白い紐で綴られたノートブックは、今もかうして殘されて御座います。なつかしの「山の手町より」……。

其過ぎた一週間に神と國と人に奉仕する事をしみ〳〵と敎へられました。「限りなき主の御愛……。貧しい自分には何もない。又なんにも要らない。唯有るものはキリストの十字架のみ、求めるものは主の御愛のみ…………。」親睦會に飛んでもない餘興をした處から「梅干さん」さうしたニックネームも可愛い方達から戴きました。ふとした、たはむれ事からお近きになつた、フエリス女學校のお小さい方々と今でもお交りして戴いて居ます。そして私達のお手紙にはいつも定つて「又今度の修養會にお逢ひするのを樂しんで待つてます。」と記されてゐます。

す。

○

女子英學塾某生

一、午前中の集會が多過ぎると思はれます。

一、一般に落付きがない樣に思はれます。同時に參會者が各自一層引締つた眞摯な敬虔な氣分を以て一週間を聖別致し度ふ御座います。幾分か浮いた遊び半分な樣子を昨年拜見致しました。

○

宮城女學校某生

夏の休が近づいて參りますと共に、あゝした岡の上の樂しい一週間の思ひ出が、いよ／＼深うなつて來るのを覺えます。ほんとうにあの一週間は美しい生活で御座いました。丁度日曜の朝に皆んな小さいグループにわかれて先生方がいらしてお話して下さいました。あの時の上野先生のお話美しいプライベートな集りは、私共に深い／＼印象を與へました。

一九二〇年!! 修養會のあの靜かな小さい集ひは永久に／＼私共の心をうるほしてくれる事でせう。若し出來ます事でしたらあゝした集を會の始めに持ち得ますならどんなに幸で御座いませう。

エスペラント(國際語)に就て

○獨習書。全然外國語を知らないで、エスペラントを獨習したい人、いづれかの外國語を既に知つてゐて、その外國語を通じてエスペラントを獨習したい人、それ／＼に應じる良獨習書、其他エ語書籍は、青山郵便局私書函第一號極東エスペラント書院にて取次ぎます。

○講習會。七月開始。初等科、中等科、高等科に分れてゐます。委細の照會は、牛込新小川町日本エスペラント學會へ。

○雜誌。日本におけるエスペラントの雜誌は、目下三種あります。照會は牛込の學會へ。

暑中休暇について

楽しく且つ有益であつたとして思ひ出される休暇は去年の夏季學校と一昨年の瀬戸内海の島めぐりでした。兩方は全く違つた意味で深い印象を與へられてをります。夏季學校は、子供に常に遠い自分が子供を本位に知り得た最初でした。暑いさかりの働きですから身體は實につかれましたが疲勞も苦痛も、子供達から得る美しい喜びと感謝で不思議に消されました。自分にとつては實に豫期以上の精神的に得ることの多いものでした。子供達も學校を唯一つの喜にしてゐたやうです。純な喜と色々の印象を殘して又來年もきつと來ますからと繰返して去つてゆきましたが今年は色々の都合で計畫致しません。暑い休みを東京の場末に狹い家で生活してゐる小さな子供達を見ると、しない事がすまない／＼氣がします。

瀬戸の内海の島めぐりは、地理や土地と人と言ふやうな問題に就てずい分得る所の多い楽しい旅行でしたが短かく書くにはあまりに多くの内容をもつて居ますから又何時かお話致しませう。(x生)

○

私の經驗した夏休を考へて見ますと、昨年信州の田澤の溫泉(山奥です)へたつた一人で讀みたい本だけをひつさげて行つて靜かに自炊生活をした事ですその結果は、可成り身體がよくなつた事と心ゆくまゝ思索が出來た事です。然し私には御尋ねの有益な經驗? に對しての御返事は出來ません。(n生)

○　三民先生談

夏休ですか「私の意見では夏は何もかも捨てゝ遊ぶこと。だからね私は生徒に宿題などは一切やりませんよ。宿題が／＼と氣にかけて苦しませるのは好きませんからね、私自身はお休が來ると小さな行李に輕い用意をして何處へでも招いて下さる田舍へさつさと行き方々へ旅行しますよ、テニソンの詩か何かきつと好きな詩の本を一冊程もつてね自然につかつて詩に共鳴して一夏を出來る丈楽しく過します。」

鈴蘭の獨言

浅井治子

或日本部の事務所に一箱の鈴蘭が北海道の一友から送られました。それは私共に思ひがけぬ計畫を立てさせ、中歐學生の爲に五十二圓の義金を得る資料となりました。

第一の鈴蘭　私の運命の急變を何といふ言葉で云ひ表したらよいでせう。二三日前迄私は北海道の廣い野原の眞ン中に咲いて居た一本の鈴蘭でございました。所が今私は東都一のホテルの食堂に貴婦人の胸を飾つて居ります。夢にさへ見た事のない此大廣間そして此電燈の火のまばゆさ、一體私共はどうして此處に伴れて來られたのでせう。

第二の鈴蘭　或朝の事でした。私は毎日少し宛開いて居た花片を今日は滿開させやうと全身の力を込めて開き初めたのです。初夏の心地よい日光が照つて居る下で、全力を盡して花片を一つ一つ開く事、それが私の務めであり、其所からよい香りも生れ出るものと私は信じて居ました。するとふと私は左のやうな會話をきゝつけました。

「此箱に一つぱい摘んで往きませう、私達には餘り珍らしくない此花も、東京へ行けば珍重がられるのでせうね。」

「香の失せない中に屆くといゝのね。」

聲と一緒に私の友達等は一本一本摘まれては少女達の手の束に加へられて居りました。おや〳〵私も亦摘まれて終ふのか、此現在の喜びと滿足とは誰にも奪はれたくない、私は此儘にして置いて貰ひたい。摘まれる位なら咲かなければよかつた、等と一人呟いて居りますと、白い手先が私の莖をポッと折つて終ひました。其後の事はよく記憶して居りません。

第三の鈴蘭　廣い野原に青空を戴いて咲いて居た私達

が、こんな小さな箱の中に押し込まれやうとは思ひがけない出來事です。蒸し暑い事一通りではありません。眞白な花片はちぎれ、丸い鈴が壞れ、仲間の多くは醜い不具者になつて箱の中にショゲかへつて居りました。其間は後できけばたつた丸二日だつたさうですが、私達には一月か二月のやうに思はれたのです。とにかく苦しい旅の後でやうやく送り屆けられた所はＹＷＣＡと表札のある洋館の三階建の家でした。一體私達はどうなる事か、どんな人の手に渡つて、どんな最後を遂げるものだらうと、皆元氣のない顔をして蓋を明けられるのを待つて居ました。

第四の鈴蘭　二三人の人の話聲にふと聞き耳を立てると、それは私達の身の振り方の相談らしいのです。

「折角の心づくしを此儘にするのも惜い事ですね」

「唯机の上に置いて私達が眺めるだけでは勿體ないぢやありませんか」

「此上善くは使へないといふ位よく使ひたいのね」

「之を花束にして賣つたらどう？　中歐の學生の爲に」

「それがいゝ、それがいゝ、けれど何所へ賣りに行くの？」　（暫らく一同沈默）

「帝國ホテルへいつて見ませう、思ひきつて」

「西洋人は喜ぶでせうね、ぢやあそうしませう」

胸をドキドキさせながら聞いて居た私は、自分達が何所かへ伴れて行かれて、賣られて終うのだといふ事だけはわかりました。田舍育ちの私達は氣が氣ではありません。けれどとにかく私達を一番よく使つて下さるのだからと、其人達の手に自分を任せて終ひました。其頃はもう新しい空氣や水を充分戴いて居りましたので、元氣も恢復し大分皆の顔が生々して參りました。

第五の鈴蘭　帝國ホテルと英語を其まゝ使つてあるのも尤です。それは外國人専門の旅館で、出入する人は皆西洋人です。私達の伴れて行かれた時は丁度お茶の時でした。光つた銀のお盆の上に私達の束が丁事に並べられた時、自分ながら輕い誇を感ぜずには

居られませんでした。

「中歐學生の爲に、花束をどうぞ」と私共を此所に伴れて來て下すつた方の一人は、私を一人の紳士に差し出しながら云ふて居られます。

「いくらですか」

「價はございません。いか程でも」

紳士は一寸困つたやうな顔をして紙入の中から紙幣を一枚取出しました。見れば五圓の紙幣です。おつりを待つ様子もなく其紳士は得意氣にボタンの穴に私共の束を挿しながら、廣い廊下を大股に歩んで行かれるのです。中歐學生の救濟といふ事も皆さんのお話を総合して私達にわかつたやうに思はれます。そして私達は其可哀想な學生を助ける爲に賣られるといふよりは、かうして寄附金を得る手段となつて居るのだといふ事もさとりました。

「遠い國の學生達、一箱の鈴蘭があなた達の爲に斯うして働いて居る事は、夢にも御存じないでせう？或一束は親切な人の紙入から十圓の紙幣を引出す力となりました。野原に咲いて時が來れば枯れて終ふ私達が、こんなお役にたつたのですもの、どうして喜ばずに居られませう。あなた方のお國にも私共と同じ鈴蘭の花がございますか。花自身には何の價もありません。唯力一つぱいに勢出して咲く事だけが私共のつとめです。けれど之に人の智と愛とが加はつて、私達は夢にも思はない働をする事が出來ました。間もなく皆様の御手許に日本の學生から集めたお金が參る事でせう、其時にはどうか此鈴蘭の物語を思ひ出して下さい。」

一箱の鈴蘭は右の様に用ひられました。ミセスウツド、渡邊、堀、淺井の四人が空腹も疲勞も忘れて 夜の九時頃感謝しながらホテルを出た時、四人は次の週に又同じ企を實行しやうではないかと 相談をまとめた程其日の經驗は愉快なものでした。 丁度一週間の後私共は一人の篤志家から花の寄附を得て 四五十の小さい花束を作り、再び同ホテルに出かけました。 其夜の事は機を見て記します。 唯百十三圓五十錢の收入を得た事だけは附記せずには居られません。

中歐學生救濟御寄附金報告

高橋千代外一名……金一圓也
井原高等女學校校友會……金五圓也
女子興業學校校友會……金五圓也
檜垣保世……金五十錢也
八戸高等女學校職員生徒一同……金六圓〇八錢也
何鹿高等女學校校友會……金二圓也
姉妹實科高等女學校……金八圓也
倉敷高等女學校校友會……金十五圓八十二錢也
巴高等女學校……金七圓也
女子職業學校聖書の組……金十四圓十五錢也
西條高等女學校校友會……金三圓也
梅花高等女學校青年會……金十圓也
門倉ふじ……金十圓也
リリー寶代……金五十二圓三十錢也
ウキルミナ女學校……金五十圓也
同志社女學校青年會……金七十八圓也
南幸田高等々學校……金四圓也
福岡女學校青年會……金五圓也
大江高等女學校生徒一同……金十圓也
石本男爵夫人……金十圓也
メンデルソン夫人……金五圓也
野村美智子……金五圓也
共立女學校片桐やえ……金五圓也
横濱女子青年會……金七圓也
旭川高等女學校職員生徒一同……金十八圓也
靜岡英和女學校青年會……金十圓也
豐津實業女學校……金五圓也
大分日田高等女學校……金十圓九十一錢也
花質上……金百十三圓八十錢也
菊地章子……金一圓五十錢也
フレンド女學校……金六十一圓八十錢也
女子英學塾青年會……金四十一圓八十三錢也

以上　（大正十年六月廿日迄の分

合計　六百三十九圓六十九錢也

東京基督教女子青年會

□體育部の活動。第一回の競技會が五月二十一日及六月一日の兩日午後七時半から當會館で開かれました。當日は内外の體育に興味をもたれる方々、青年會の幹事の方々百名近くも御出席下され御熱心に御覧下さいました。ダンス、體操、器械體操等各自のベストをつくしました。殊に六月一日會の後に、河井先生より「米國の或婦人が體育クヲブに五百弗送られます」との嬉しいニュースを突然承り、一同夢ではないか、夢なら覺ぬやうにと喜びました。

切符賣上高八十五圓也。

□六月　十一日十近くのクラブが合同し、種々の熱烈な競爭があつた後其日の優勝ハーベストクラブに優勝旗の與へられました時各クラブよりの拍手は私共の心をよろこばせどんなに皆を引きたゝせましたでせう。負けた者も勝つた者も一様に。

體育部がかくも盛になりましたのも自分を忘れ專心それにつとめられるミス・フエリスの御盡力によることを一同感謝いたして居ります。切符賣上高は大部分夏期修養會へ出席する代表者の費用にあつる

つもりです。體操の組は五つで火木金に御座います。

□家庭部。文學講演會ジョージエリオットとヘーデの人生觀、講師豊田實先生。宗教及婦人問題方面に渡つて此講演を承り、讀書の不足勝の私共には眞に有益な會でした。

「母と子」の會、松岡久子氏の「東洋人がもつと親しめ」と言ふお話を承り、私共色々考へさせられました、其後でミス・フエリスが小さなお嬢さん坊ちやんに可愛い遊戯をお敎へ下さいました。當日手製の菓子を賣り其賣上高を中歐學生救濟資金寄附の一部にあてました。

□商工部。六月三日小名木川及六月十一日川崎にある富士紡績工場を訪問し、仕事におわれて休む暇のない工女等をしばらくの間種々のゲームにすべてを忘れて樂しませるやう體育奬勵につとめて居ります體操科指導者の組の者も行きたのしくゲームをした爲あの二時間工女さん達にはどんな幸福な時なのかわかりません。「また合ふ日を」待つて居られます。

六月十一日湧泉クラブの者が第一回に鎌倉休養所へ參りました。

▽レコード音樂會

第一回。スタークラブ主催。昨年米國の夏期修養會出席者より一萬四千圓近くを我女子青年會の土地購入の資に送られ、其感謝の意を表すために人形を送りたく切符を賣り純益六十五圓を得ました。

第二回。商工クラブ全部主催。夏期修養會へ代表者を送る爲に。

芙蓉クラブでは、毎週聖書研究會を開いて居ります。

□傳道集會

六月十八日午後二時より「基督に對する疑惑」

六月十八日午後七時より「疲れたる者よ我に來れ」

六月十九日午後二時より「我汝等を友と呼ぶ」

三回共河井道子先生の御講演で、先生を通しての神の御言葉を承り、はつきりと神を認め、或は自分の神の御恵によくしてをることを始めて知り感謝の涙にむせび或は今迄おかした自らの罪を悔いほんとうにくだけた心となつて一同神の御前にひれ伏しました。殊に今日迄神を知らず過して來られた姉妹方の内より卅五名の聖書研究決心者を出しましたこと、誠に奇しき靈の御力と感謝にたへません、

神戸基督敎女子青年會報告

□五月中會館に出入の人員一千三百六十五人にて一

日平均四十五人強になります。今日（六月十六日）の様なうつす様な雨の日も晴天の時と同じ様に賑はつて居ります。

□職員が一人殖へました、山本まち子姉にて衛生普及事業の専任者です。市當局者及び醫師方の賛成を得て近く衛生婦人大會を開き市の廣く婦人方の爲特に女醫、看護婦諸氏を御招きし衛生普及に就いて數專門家の講演を願ふ筈になつて居ります。

□六月十一日にはミスダオの御來神を幸ひ當縣内務部長成毛氏の送別を兼ねて親睦晩餐會を開きました來會者は有吉縣知事夫人、成毛氏御夫妻、海老名博士、木村社會課長、關西學院長ベーツ博士夫妻、其他幹部委員諸姉及び夫君達三十三名で外國人とか日本人とかいふ區別は全く取り除かれ互に意見の交換をなし出席者諸氏のテーブルスピーチ等あり誠に有益なる會合でありました。

今年の夏季修養會には十二名のものが當會より出席する筈になり目下其爲に一同努力して居ます。

横濱基督教女子青年會報告

□本會は過去一ヶ月間久し振りに本會資金のため大活動を致しました。當市記念會館に於ての五月廿日廿一日兩夜のヘレンケラー活動寫眞によりては、同寫眞に對しての當市民の感謝の言葉の外に純益千九百五十圓を得又六月三日四日の當會館に於てのバザー及び六月十日十一日の矯風會バザーの紅茶店より五百圓以上の利益を見るに至りました。豫期以上の物質上の成功と共に委員、會員、教育部生徒職員一同が尊い美しい經驗をした事を喜ばずに居られません

□教育部。晝夜學部共日を追ふて發展しつゝあります。毎水曜日夜學後ミスドレーパーの御教授にかゝるコーラスの組は生徒職員一同の一週間中の樂しみの一つとなつてゐます。

□移民部。米國一部の寫眞結婚の禁じられた今日も尚講習のため渡航婦人出帆の世話、買物の世話に移民部幹事はルキズクラブより手傳の方々と共に忙しい日を送つて居ります。最近出來上りました縣廳の移民講習所も本會幹事により美しく純西洋式に裝飾されし事を喜んで居ます。

□クラブ。

一、B、G、クラブは來る十七日午後七時より例會を開き、河井先生の宗教的御話ある事とて一同樂

しみに致して居ります。會後會員一同の發起により中歐學生救濟のため獻金がある事になつてゐます。

二、支那クラブ、一ヶ月前より毎火曜日午後四時よりニコ〳〵とした十四五人の支那女子により例會が開かれ毎回有益に二時間を本會館に送られます。次會には當市支那町に傳道さるゝリアング氏の聖書の組がある筈で御座います。

プール女學校女子青年會現況

□祈禱部。凡ての働の原動力が祈にあるんだと言ふ事を盛に皷吹して居ます。金曜日は夜寄宿生全體。月曜日は通學生有志（平均廿五名）上級生司會をす。

□誘導部。「小さき集り」と申し下級生の會合は中々盛で聖書の話に限らず世界の名作、童話なども熱心なしかも其方に趣味を持つてゐる委員によつて傳へられ、金曜日の此會を小さい人等は待兼て居ます。

□仕事部。阪神沿線のクイゼにある托兒所の爲に寄附などして居ます。委員は實地調査に行つて生徒全體に報告し援助を勸誘す。追々教師方の承諾を得て仕事をいたす心算です。

□社交部。缺席生徒の慰問は常にして居ます。四月卅日約百名程の會員登山六甲の絶勝の中で心ゆく迄遊び、歸途御菓子を會員各自出合せて十三橋の博愛社へ持つて行つて貰ひました。尙會員の體育の爲に體操會の樣なものを學校の運動會と獨立して設けたいと委員共は望んで居ます。

□日曜學校部。本校及三分校共委員の所によつて順番に行つて居ます。

中歐學生救濟の事につきましては河井先生からも親しく其模樣を伺ひましたので委員たちは最も愼重に協議しました結果左の決議を得ました。

一、事ある度に寄附〳〵と賴み歩くのは如何にも我々の無價値の表現だ、儉約によつて得た金を與へるのでなくて積極的に働からではないか、少なくとも時間と勞力との勞力の結晶によつて得たリペーを惱める兄弟姉妹に送らうではないかで次の議案が決せられました。

一音樂會。六月十一日（獨唱、合唱、獨奏 歌劇、オーケストラ）　二お菓子デー。六月廿五日（珈琲、落花生、蒸菓子 ゼリー、汁粉 等）

委員共は必死の覺悟でいたします。勞力の汗と祈禱の涙でたとへ一大學生のパン一片珈琲一杯にでもなりますれば滿足です。

（安井かね）

消息

□スコット幹事、紐育幹事養成學校々長ミスダウを伴ひて關西に三週間旅行せり。

□河井幹事　六月十一日水戸に行き該地に設立されたる學生女子青年會の爲の講演會にのぞむ。同會の事務所は水戸裏南町四百六十二ミスクラゲット方。

□堀順子氏　長く本部に庶務幹事として働きたる同氏は來る七月廿九日横濱を發し米國に留學の豫定。

□土屋繁子氏　大阪女子青年會の幹事たりし同氏は、去六月三日大石嘉米太郎氏と御結婚され靜岡市見付町西ノ小路に住居さるゝ事となりたり。

□廿粕鍋子氏　本部委員の同氏は吳仙壽氏と結婚されたり。

□志立ヤナ子氏　東京女子青年會々長志立夫人の御長女なる同女史は昨年英國に於て學位を得られ其後歐米を旅行し六月十八日御無事歸朝さる。

□志田くわ子氏　本會の同情者にして長くハワイに住居せらるゝ同氏は御兩親訪問の爲御歸朝中又七月同地に行かるゝ由。

□内山鑑藏氏　商用にて上海より渡來せられし同氏は本部に於て支那の一端につき信者の立場よりの視察談を講話せらる。

□ミスロンンドン　女子學院の教授にして本部委員の同氏は一ヶ年の休暇を得て七月ロンドンへ歸國の途につかる。

□細谷春路氏　父君が病氣治療の爲仙臺より御上京中なり。

□木村熊次郎氏　米國大平洋沿岸にて日本人間の傳道に從事せらるゝ同氏は數ヶ月間休養の爲六月歸朝同氏は特に本會の爲に同情を持たる。

□磯部とよ氏　神戸青年會委員の一人なる同氏は近々御上京新渡戸氏宅に數日お泊りの由。

□山本未知氏　神戸女子青年會の發展につれ專門的巡廻看護婦を必要とし今回同氏を招聘したり同氏は京都醫科大學院養成科卒業の後横濱正金銀行員の一家族に從ひ數年間海外にて多くの經驗をせし人なり

編輯室より

□松岡夫人の御友人遠藤八重子氏女子高師教授の大江スミ子氏甘粕なべ子氏を新に本部委員としてお迎へしました事は一同の大なる喜です。

□編輯を終りました本日（六月廿一日）エスペラントの御講演を何盛三氏から伺ひました。來月御紹介申上ませう。八月號は「自然と宗教」と言ふやうな主意で、すが〳〵しい氣分のものを皆様のお友達としてお送り致し度いと望んで居ます。御投稿を喜んでお受いたします。

□賑かになつたと喜んで居ました本部の事務所に二つの大きな穴があきます。一は堀順子氏の御渡米の爲今一つは其内に發表します。

□夏季修養會に人員の制限のある爲或方々にはお氣の毒に思ひますこられぬ方はお心丈は是非ゐらして下さい。（岡崎）

雜報

□文藝夏季講習會が七月十日から十六日まで小石川東洋大學校であります。講師は島崎藤村、吉田氏其他七名。

□早稻田大學では建設者同盟主催で二回講習が開かれます第一回は八月一日から同八日迄第二回は八月十日より同十五日迄、文藝、哲學及思想問題講演、講師は大部分同校教授。申込は七月廿五日迄。

□輕井澤日曜學校教師養成所第五回講習、七月廿六日より八月五日まで。

舊約聖書研究、教育心理、教授法、日曜學校の組織及管理其他。

申込は七月十五日迄に左記へ。

東京赤坂區榎町十番地

コールマン方宛

△本月の聖書の講義間に合ひません爲休載。

摘要

△本誌代金は總て前金にて御拂込被下度　前金切れの捺印有之候節は直に御拂込被下度候

△御送金は振替にて拂込まるゝ方便利にて且間違も無之候、但手數料壹錢を御加へ下され度候。

△振替、東京、貳參七貳參番

「女子青年界」定價及廣告料

定價郵税共

	内地	海外
一部	金十五錢	金拾七錢
一年前金	壹圓五十錢	金壹圓八拾錢

廣告料

一回掲載	
一行	金五拾錢
四分一頁	金五圓
半頁	九圓
全頁	金拾五圓

年極又は回數により割引有

大正十年六月廿八日印刷納本
大正十年七月一日發行

發行所　神田區錦町一丁目十六番地　日本基督教女子青年會　電話神田三六五二番　振替東京二三七二三番

發行兼編輯人　河井道子　神田區錦町一丁目十六番地

印刷人　前川吉太郎　芝區新銭座町七番地

印刷所　同　三成舍

message, like those of Dr. and Mrs. Ebina, reached the heights of spiritual interpretation of the present, and prophecy of the better days to come. While in the United States on his recent trip, Mr. Naruka had been entertained at the National Training School in New York, and also at the Seattle Y.W.C.A.

The Child Welfare Exhibition shown in Kobe during May, has now gone to Himeji. When we first hung the Association's modest share of pictures, we feared the more spectacular and ghastly material that was abundant would entirely overshadow it, but it turned out that some women, at least, were distressed at the latter, and came with relief to the positive educational material shown by the Association. One of them commented that when women had not merely a nominal, but a real responsibility for getting up the exhibition, all the material would be of that type. The Child Welfare Exhibition was well attended, and aroused great interest. At the Women's Mass Meeting held by the Asahi on June 5th, Health Education was called for by a woman from the country, Miss Onomi responding that the Association hoped to help start such work, and Dr. Noma, a Christian women physician also volunteered to help. The next day, at the Y.W.C.A. Board meeting, Miss Yamamoto, a graduate nurse from the Kyoto Government Training School, was appointed experimentaily as Y. W. C. A. Health nurse, and has begun her work by calling on other nurses preparatory to a public meeting to arouse interest in Health Education and higher standards among nurses.

Miss Sills morning English classes have been organized into a Friendship Circle, a club for leisure girls.

Considerable interest is being felt just now throughout the Association in the Summer Conference at Gotemba. Including a gift sufficient to send one delegate, received through the National office from Girl Reserves in Virginia, one hundred thirty yen has already been accumulated in the Fund, and it will be possible to send a large delegation. This being the first time that Kobe has had a good number of delegates at Conference, we are greatly anticipating the time of fellowship with the national group.

KYOTO Y.W.C.A.

The three student clubs of the Association held a rally on the afternoon of June 11th, which was their first meeting together since their organization. More than 50 girls were present. After the meeting which was addressed by Mr. Hatanaka of the Kyoto Kyokai, the girls sang their club songs and played games together. The Rainbow Club is composed of Fifth year High School girls, the Girl Reserve Club of Fourth year and the Star Club of first and second year students.

The Kyoto Committee women have decided to have a second meeting each month aside from their regular monthly business meeting. The purpose of the meeting will be a social hour at supper and an hour of Bible study and prayer for the Association.

On June the twelfth the Association started an hour for hymn singing on Sunday afternoons. So far no plans for a regular service have been formed, but girls who want to learn hymns or girls who have no place to go on Sunday afternoons are welcome to spend an hour or two together. Three girls from a high school with which we have had little contact so far came on June twelfth and agreed to bring more from the same school the next week.

The Triangle Club, composed of girls from the main Post office, is busily engaged in making scrap books to be sent to hospitals. They are making one of distinctly Japanese views to be sent to a Club in America which wrote to them recently. The president of the Club was recently confirmed in the Episcopal Church and she has been chosen as a delegate to a Y.W.C.A. conference this summer.

At a recent meeting of an "International Friendship Society" in Kyoto was made the discovery that there are more than 1600 Koreans living in Kyoto, of whom 800 are women. We hope the Association may be able to get in touch with these women in the future.

significance in Japanese—which would be, a gathering of these who aim to develop leadership in themselves that they may lead others.

Membership cultivation continues in different neighborhoods. A musicale was given June 18 at the home of Mrs. Maki in Tennoji, with piano, violin and vocal numbers, also a talk on Association opportunities. The following week an "At Home" afternoon is planned at the Association for extending our acquaintance and membership.

The June Board meeting, the first of the new Association year, was excellent. Fifteen members and guests were at the mid-day luncheon which was followed by the business meeting. It was a great pleasure to have Miss Dow at this meeting and also Miss Scott. Three of the new Board members elected at the recent Annual Meeting were present, and the following officers were elected for the coming year: President Mrs. Asai; Vice-president, Mrs. Sakabe; Secretary, Mr. Maki; Treasurer, Mrs. Shoji. A long step forward was taken in the adoption of a budget largely increased over that of last year, totaling over Yen 7,500.00. The Board voted to call as our new general secretary, Miss Haru Asai of Tokyo, who has been for some time the efficient editor of the Japan Y. W. C. A. Quarterly. It is understood that Miss Asai will acccept this call, and the prospect of her coming gives the greatest satisfaction to the Osaka Board, secretaries and members.

Miss Dow was delightfully entertained later in the week by several of the Board members—by Mrs. Shoji at lunch, Mrs. Asai at a tea, and Mrs. Hoshino at dinner, these occasions including Miss Scott, the foreign secretaries and other guests. Mrs. Asai also took Miss Dow for a brief call at the beautiful home of Mrs. Chiura at Sumiyoshi, and later they enjoyed visiting at Mrs. Converse's home her class of forty or more children engaged in English, games and singing. On other days, Miss Dow saw something of the notable social service work maintained by the city and prefectural governments in Osaka—the Children's Consultation Office, the Municipal Lodging and Boarding Houses—also the Ohara Institute. The chief shopping districts were visited, also the famous Bueraku puppet show, and the wonderful Shoin Girls' School with its complete modern equipment, on the Nara densha line. There are other sights waiting for her for a second visit before she leaves Japan.

KOBE

The reaction of board women and others to the life of Miss Dodge as they heard and read about it was very real and vivid. They wanted more material about her; they said "We must do more ourselves" and "Where is the Grace Dodge of Japan.?"

On the 15th Miss Kawai spent half a day with us and had an informal conference with future leaders of neighborhood clubs, besides meeting and talking with other leaders and friends. On the first day of June the Kumochi Neighborhood had its opening meeting in a pouring rain, but with much spirit and promise. Mrs. Isobe is the leader.

Mr. and Mrs. Isobe entertained Miss Dow during her brief stay in Kobe, June 11 and 12. During Miss Dow's visit a dinner-party was given for her and Mr. Naruke, the vice-governor. who with Mrs. Naruke will soon go to Nagoya. The board members and their husbands were present, also Dr. and Mrs. Ebina of Kyoto, Dr. and Mrs. Bates of Kwansei Gakuin, and Mrs. Ariyoshi. Governor Ariyoshi was out of town. The presence of so many significant people was made further meaningful by speeches from those mentioned, in which the deeper meanings of international relationships, the place of women in promoting them, the emigration work of the Y. W. C. A., and its other social work were mentioned. Mr. Kanzaki, new dean of the commercial college of Kwansai Gakuin, uutil lately general secretary of the Japanese Associations on the Pacific Coast, gave a strong address, and Mr. Kimura, head of the new social service department of the city government, spoke of what "social work" means and the new departure of the Y.W.C.A. in employing a Public Health Nurse, Miss Dow's

and varied and it means much for them to add an hour a week for music to their already over crowded schedule.

The next meeting of The Business Girls' Club will be addressed by Miss Kawai. There will also be a contribution for the students of Europe, and an appropriation from the treasury of the club will be voted upon. This is entirely on the initiative of the girls.

The Chinese Girls Club has organized with a fine group of officers. They have chosen the name "Be Square", and hold meetings weekly, one meeting a month being a Bible class taught by the pastor of the Chinese church. Most of the girls are students at Ferris.

We have a new and efficient cooking teacher in the person of Mrs. Chamberlain, who is interested in the girls.

The secretaries have been requested to help with the furnishing of the Emigration Building foreign rooms, and have assisted in the selection of the picturers to hang on the walls. Hibi San finds manys way in which to help the women who are leaving for America, South America, and Hawaii.

Mrs. Jordan has left for a month's vacation, to be spent in various parts of Japan. During her absence the local secretaries have moved to the Residence.

OSAKA Y.W.C.A.

In educational work, Foreign Table Manners have had special emphasis or late. The Foreign Cooking Class treated itself and some of the secretarses to a trip to the Nara Hotel for full experience of a table d'hote dinner. Then the foreign secretaries were asked to give instruction in table manners to a friend of one of the nightschool teachers. The guest arrived in most becoming foreign dress and proved a ready learner. The Advanced English Class was also entertained at dinner following a language lesson on table manners. Miss Ragan is fortunately prepared to meet the call for shorthand teaching, and an enthusiastic class, including some of the nightschool teachers has begun work with her. Through the gift of a typewriter from our President, Mrs. Asai, some months since, some typing practice is also available to our members. Increasing calls come in for private lessons in English and piano. All available teachers are fully occupied and Miss Matsumoto, a graduate of the Kanagawa Soshin, has been engaged for fulltime work in the educational department. An exhibition of the nightschool work will be held Wednesday night, June 29. In the day classes, Sociology holds a steady interest and might almost be listed with the Bible classes, for Mr. Shimamura teaches with a marked Christian emphasis. The class often stays nearer two hours than one with no slackening of interest.

Owing to the absence of practically all of the former Bible class teachers, a complete re-organization has been necessary. In the interval, it was good to have requests come in from the girls for further Bible class work. Four classes are now under way, led by Mrs. Madden of the Christian Church Mission, Mr. Serino of the Naniwa Church, Miss Funabiki, the new Bible woman of the Methodist Church, and Mr. Takemoto, paster of the Tenma Church. The two latter teach all the nightschool girls, meeting them in two sections once a week a half-hour before usual class work, and the girls show keen interest in the teaching.

Miss Ragan has been urgently invited to teach English in the Umeda Government High School, one of the leading ones in Osaka, where Miss Hard also taught, and her teaching will soon begin. A number of the new girls who recently came to us from the Postal Money Order offices (Chokin Kyoku) have been organized into a club under Miss Ragan's leadership. Desirous of some word for group organization that would have more significance than the direct importation of club — "Kurabu" — the word "sono" (garden) was suggested (after some dozen or more other attempts) and has proved acceptable to the girls. It is known to be also in use in an organization sense in other places besides the Association. The club name is Michibiki-no-sono. A direct translation, "Garden of Leaders" does not carry a true idea of the

large circle ate their supper, singing their special club songs between bites and cheering everything from the evening to the eats

The Leaders' Class which is composed of Club leaders, Girl Guide Leaders, teachers and Y. W. C. A. Secretaries has been making great strides and outs tripping our fondest hopes. Our pride in it reached its greatest proportions on the afternoon of June 11th when two of its members went to Kawasaki and taught Marching, Exercises, Folk Dancing and Games to 150 athletically inexperienced girls there.

Special evangelistic meetings were held on Saturday afternoon and evening and on Sunday afternoon, the 18th and 19th. All three were adressed by Miss Kawai and were well attended. The Saturday afternoon meeting was designed especially for students while the evening meeting was especially planned for business girls, with the Sunday meeting one in which the efforts of both meetings were brought to an issue. Thirty-five decisions resulted and great earnestness was shown among all the girls assembled.

A new method and a popular one of raising money for club purposes has been discovered—victrola concerts!. The Star Club of the Girl Reserves made sixty-five yen in one evening with tickets selling at twenty sen each. This week two more concerts are to be given, this time by business girls' clubs. The Star Club girls are dressing dolls to send to American Summer Conferences with their money and also sending their own delegate to Summer Conference at Gotemba.

Kohori San's father has recently made liberal gifts to both the Association in general and to the Rainbow Club, while the real interest of both her brother and sister is being manisfested in the organization that claimed so much of her time and love and in the faith that held her strong through all her illness. Kohori San's sister was among the girls who made decisions on Sunday.

On June 15th, the St. John Club held their first initiation service, at which time 16 members were initiated. The girls had worked very hard to get ready for the event. Their training in the hospital is taking more and more of their time and this practical work added to their regular classes leaves them little time for the Club. This accounts for the long time which has elapsed before they were ready for initiation. They had decorated the room very beautifully with hangings and flowers in the Club colors. On the wall the Club initials were outlined in paper roses, the Club flower. Since there is no Japanese Girls Work Secretary Kato San had charge of the initiation and Miss Doane, the Club advisor, pinned the arm band on each girl after she had lighted her candle, which she held in a paper rose, at the Association candle (This same candle is used for the initiation service of the various Clubs). The effect, in the darkend room, of all the girls holding their candles high, as they stood in a circle singing their closing initiation hymn, was most impressive. After the singing of Club songs and cheering of the President and others, refreshments were served by the Social Committee. Then all joined wholeheartedly in an hour of lively games.

YOKOHAMA Y.W.C.A.

The Yokohama Y. W. C. A. proved the trusth of the adage—"It pays to advertise", in the moving picture showing the "Life of Helen Keller" recently given. The poster symbolically showing Helen Keller reaching out for an education was drawn by Miss Lillian Miller a young artist whose work has received wide recognition. This poster was displayed very widely, tickets were sold everywhere, one Louise Club girl selling more than one hundred yen's worth. Result: packed houses on two nights, and on the second night numbers of people turned away, and net profits more than 1,950 yen.

On June 4th and 5th Club girls and Board Members and Secretaries and Association members worked with might and main for the Association Bazaar held at the Association Building. We were glad to have in our "Book Room" the leaflet compiled by Miss Onomi of Kobe, on the Life of Miss Grace Dodge.

Girls to the number of from 20 to 30 are meeting every week for chorus work under the direction of Miss Marion Draper. These are girls whose interests are wide

THE YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

VOLUME XVIII | JUNE, 1921 | NUMBER 6

NATIONAL

The National Commitee held its last meeting before the summer vacation on Wednesday, June 15 at headquarters. Two new members of the committee, Mrs. Oe and Mrs. Endo, were present. The work is growing so rapidly that the committee is seeking the help of additional members to promote the things that need to be done.

Within the past month the funds for Central Europe Student Relief have been added to very materially by the sale of flowers at the Imperial Hotel on two occasions. A total of One Hundred Sixty Yen has been raised.

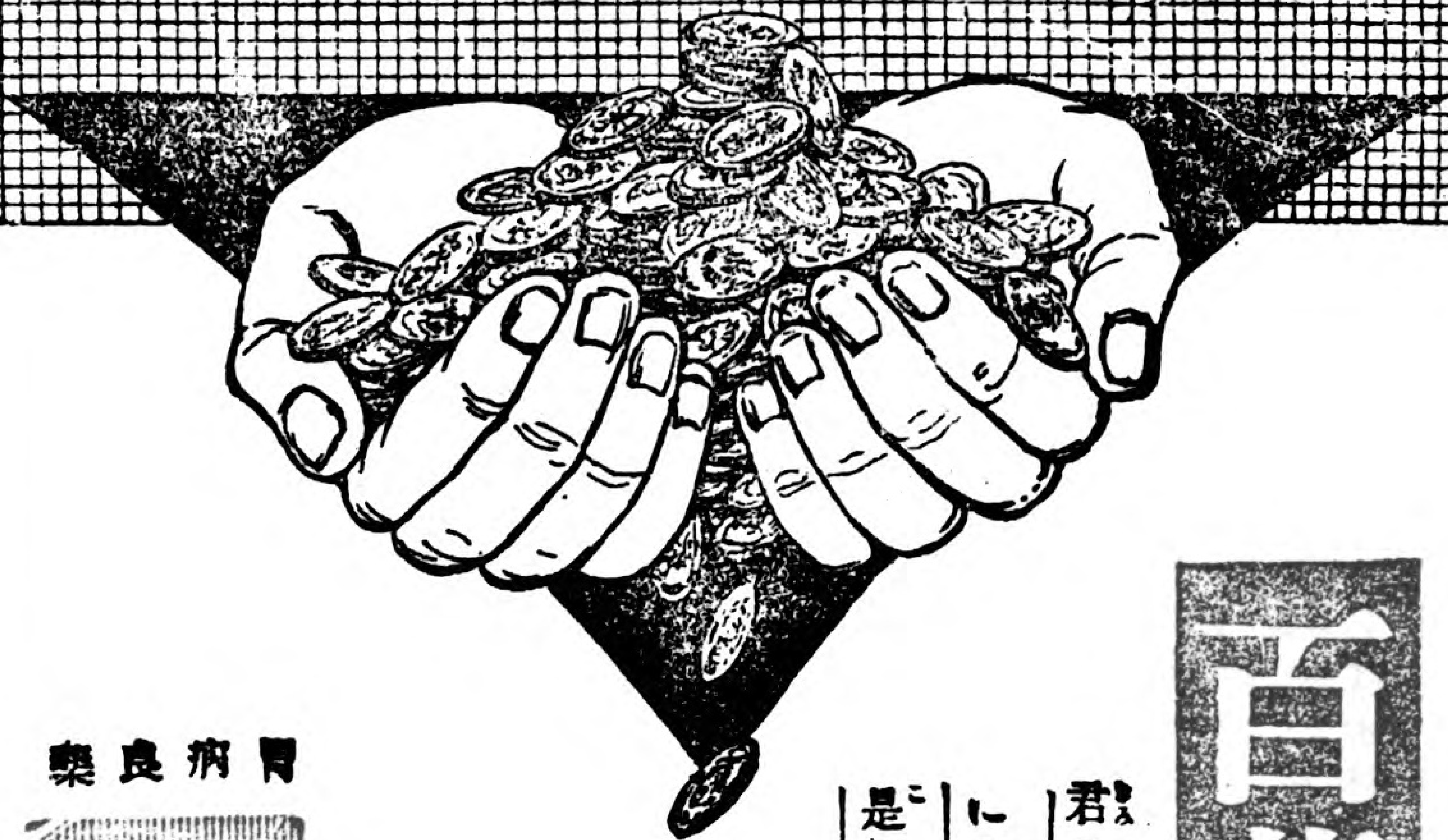
On the 2nd of July the National Y W C A unites with Tokyo Association to raise funds for European Student Relief and the local Y W. C A work. Mme. A. Bonhoff-One, Mr. N. Alexandroff, Mr. G. l'Orange and the members of the Russian Society of Lovers of Choral Music will give their services in a splendid program of music. A special feature of the second part of the program will be the singing of old negro songs of the south, by a chorus of American men.

TOKYO

The Physical Department gave, at the close of its term three Gymnastic Exhibitions. On the 20th of May all club members were invited. On the 21st 150 tickets were issued, and sold almost immediately, in spite of the fact that floor space for only 75 chairs could be spared. However the programme zipped along so that the spectators were on their toes most of every minute any way. On June 1st the Exhibition was repeated for the Dormitory girls, 59 of whom came/ here were, too, such important personages as a Buddhist priest and the owner of a factory that employs 4000 girls and has machines ready for 3000 more. The latter was tremendously interested in all the exercises and asked that we send some one to teach his girls and give them recreation. Two important Japanese women, membe.s of the city social service deptartment were there, and the princi al of th physical Education School, with his girls, several of whom have since joined our evening Gym class.

The forty girls in the exhibition marched, drilled, danced and played the games with a precision, grace and assurance that girls who had been training for a longer period could have been satisfied with. After it was all over Kawai San took our breathe by announcing a gift of $500.00 to the Gymnasium. Extensive plans are on foot for its expenditure. The Athletic Club cleared 85 yen on the Exhibitions, with which they will purchase a piece of apparatus for the Gym and send two of their members to summer conference.

The first Interclub Athletic Meet was held June 11th in the Gymnasium. At 5.00 P.M. the eight club captains drew for heats and places on the floor. At 6.00 the judges were armed to the teeth with instructions, pads, pencils, whistles and eagle eyes. At 6.30 the clubs marched into the Gym waving their club colors that the Girl Reserves had made for all as a surprise. Lastly came the Athletic Club with the huge Y. W. C. A. banner that they had ma le and on which the name of the winning team will be sewed each year. If we could insert a picture of the thrills, squeals, good sportsmanship and clubby atmosphere of that hot night! Two clubs tied for first place and Harvest won the race that decided the tie, making the Blue Triangle second. The newest Club of the Associa ion, the Mitsukoshi girls, came in third amid the cheers of all the clubs. At 8.30 all the 70 club girls squatting taylor fashion in a



日本日曜學校協會常議員會にては基督敎文學奬勵の爲本誌の保護推奬案さへ上程さるゝに至る

最近異常の發展をなせる本誌を見られしや

第十四卷第六號



内容充實
誌面增大

新約物語	イエスさまと憐な親子	齋藤敏夫
子供說教	惡に勝つ法	矢野博士
創作童話	いちご物語	高木四郎
小女小說	はれゆく空	由木こう
泰西名著	黒馬物語	西阪保治
創作童話	歌ふ石	岸直行
創作童話	雨の子	由木こう
聖書地理	キリキャタルソ	吉田源治郎
創作童謠	まり	伊藤隆

この度社内に色々新しい勢力を與へられました結果從來の物に比べて見違へる程の大刷新を加へて廣く皆樣に見へることになりました。本誌が如何に

▼信者求道者家庭の好讀物として

▼日曜學校生徒の友として

▼日曜學校敎師の話材として

愛讀されるふさはしいものであるかは雜誌そのものに就て御覽下さればお判りになります、此際是非共御購讀御申込みを願ひます。

クリスマス準備號も既に編輯に着手致し居ります申込の最好機です

●定價●

壹部拾七錢　送料五厘
半ケ年　六册　送料共　壹圓
一ケ年　十二册　送料共　貳圓

國際日曜學課準據 誌上日曜學校（七月分）

齋藤敏夫

本年の下半期分はパウロ傳です。タルソの少年パウロの生たちは本號より掲載、毎課繪入五號活字にて九ページを費し尙上欄に敎訓暗示を入れてあります。生徒用讀本として、敎師方の參考用として是非本誌を御利用下さい、必ず皆さまの好伴侶となることと受合ひです。

大阪南區貝柄町三三〇
日曜世界社
振替大阪一六一七四

長崎活水女學校に七十名、大阪プール女學校に五十五名其他の女學校に多數の讀者を有するは獨り本誌あるのみ

女子青年界第拾八巻第七號（毎月一回一日發行）
大正十年六月廿六日印刷納本　大正十年七月一日發行　明治卅七年五月七日第三種郵便物認可

一部定價二十錢